様式第２号

平成２８年度　　地 域 貢 献 特 別 研 究 費 実 績 報 告 書

平成２９年３月３０日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td colspan="2">保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>准教授</td><td>氏 名</td><td>新山　順子</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">生涯学習の視点による創作表現活動の継続の課題と支援　―現代舞踊に着目して―</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>新山順子</td><td colspan="2">保健福祉学部・准教授</td><td colspan="2">舞踊教育</td><td colspan="2">研究計画・実施・総括</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>岡本悦子
畝木真由美</td><td colspan="2">就実大学・教授
安田女子短期大学</td><td colspan="2">舞踊・芸術学
舞踊教育</td><td colspan="2">研究実施・評価
研究実施・評価</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要
（地域貢献への反映を踏まえて記述のこと）</td><td colspan="7">１.研究の概要

我が国の学校教育においてダンスは、体育科に位置づけられている。その中で「表現運動」「創作ダンス」と呼ばれる自己のイメージを身体や動きで具現化する創造的なダンスは、ダンス学習の主軸とされている。「学習指導要領」には、小学校から高等学校まで、発達段階に合わせた内容が示されており、指導法の研究も盛んである。また、学校の部活動やサークル等においても、活発に取り組まれており、成果発表の場も充実している。しかし一方で、創造的なダンスは、独自の動きを追求する創作活動を伴うため、学校卒業後の活動の場が不十分であり、継続が難しいという問題点が挙げられる。創作活動を伴うダンスは、スポーツ、あるいは音楽や美術のように、生涯を通じて実践的に学び取り組むことは出来ないものなのだろうか。これまで、社会人による創作・発表の意義や価値を探ること、あるいはダンスを生涯的視点で見る研究は、プロの舞踊家を対象にしたもの以外は殆ど行われていない。以上のような背景から、筆者らは、特に現代舞踊（創造的なダンスは、舞台芸術の領域では現代舞踊と呼ばれる）に着目して、生涯学習的視点による創作活動の継続の課題と支援に関する研究に着手した。具体的には、卒業後も活動を継続している者への聞き取り調査と、交流と研鑽及び次世代育成も視野に入れた舞踊公演開催等の実践的支援である。</td></tr>
</table>

次頁に続く

調査研究実績の概要 （地域貢献への反映を踏まえて記述のこと）	２.研究の結果及び考察 （１）研究Ⅰ：実践研究 大学等で現代舞踊を学び、卒業後も活動を継続している人が自由に発表できる場として、交流と研鑽を目的とする新しい舞踊公演「DANCE ALIVE 2016」を計画、2016年10月10日に岡山県立大学講堂にて開催した。20代～40代の大学ダンス部卒業生ら15名の参加者を得て、３部構成のプログラムを組むことができた。観客総数は約160名であった。うち72名から作品の感想などを書く自由記述のアンケートの回答を得た。アンケートには、作品や踊り手に対する好意的な意見や感想が多く確認された。また、公演の参加者には、事後に公演参加に対する感想の記述を依頼した。感想の中には、「ダンスで伝える明確なメッセージが自分の中にあることが重要」（40代女性・講師・Ａ大学ダンス部卒）等の記述が見られ、自己実現の在り方を捉え直す機会になったことが窺えた。公演に加えて、作品出品者による子どもを対象とする実験的ワークショップも行い、次世代へ繋ぐ場としての可能性も模索した。公演と同じ舞台で、子どもに動きづくりのプロセスを体験させたり、舞台裏を見学させたりすることで、現代舞踊や舞台芸術への興味を促すことができた。 作品「幕末セレブ」の一場面 ダンスワークショップの一場面 （２）研究Ⅱ：調査研究（聞き取り調査） 聞き取り調査の予備調査として、公演参加者に質問紙調査を行った。公演参加者20代～40代15名のうち、９名の協力を得た。属性、ダンス継続のために工夫していること、ダンスの価値、などをたずねた。全員、学生時代のダンス公演・大会参加歴は５回以上、殆どの人にコンクールの入賞歴があった。予備調査からは、ダンス継続には、「仲間」「時間」「場所」などの要因が重要なのではないかと推察された。質問紙調査協力者のうち８名の方から、聞き取り調査の協力の許可を得た。今後、大学卒業から10年以上経過している30代の方を中心に、データを収集していく予定である。現在、聞き取りの方法論を精査している。データの分析には、質的分析方法のＴＥＭ（安田・サトウ，2012）の手法を適用することを検討している。 ３.今後の課題 今後は、実践的支援の見直しと、予備調査をもとに聞き取り調査を進め、卒業後のダンス活動継続を阻む要因を整理し、より効果的な支援の方法を探っていきたい。 ※本研究の一部を平成２８年度岡山体育学会において、発表した。

成果資料目録	・プログラム１部 ・平成28年度岡山体育学会　研究発表抄録